

ヤクシカWG検討経過(第1回～第5回)(案)

I これまでの検討内容

1. 被害状況、推定生息数の確認

○平成20年度のヤクシカの生息頭数は、1万2千～1万6千頭と推定。

○平成20年度の生息状況は、西部：100～150頭/km²、南部：20頭/km²、その他：40～50頭/km²と推定。

○屋久島では標高700～800m付近まで暖温帯常緑広葉樹林が見られるが、これら森林を中心としてヤクシカの採食圧が増加。特に遺産地域である西部地域では、人間による土地利用の変化とともに、ヤクシカの生息数が著しく増加し、下層植生や落葉等の過剰な採食の結果、構成種の単純化や森林の更新阻害、裸地化による土壌流出や一部植物の絶滅が懸念されるなど、遺産地域の生態系や生物多様性への大きな影響が危惧。

2. モニタリングについて

○シカの個体数管理のためのモニタリングにおいては、捕獲データ（捕獲個体の雌雄・捕獲場所、捕獲月日、性比、年齢構成(成獣/幼獣)、妊娠率)の質が揃っている事が重要。

○テレメトリーによる移動の実態把握期間はこれまで1年程度の調査期間であったが、この期間では分散の過程が把握できないので、測位の間隔をあけて複数年追跡することが必要。

○捕獲個体のサンプリング（胃の内容物も年齢調査等）は、精度を高めるため、数を増やす事が重要。

○密度調査については、糞粒の分解データについて、屋久島に適した分解プログラムの検討が重要。

○生息密度、捕獲データ、捕獲圧の分布、増加率、林床植生、絶滅危惧植物、土砂流出等のモニタリング結果については関係機関で互いに情報の共有化を図ることが重要。

3. ヤクシカの個体数管理推進方策について

○個体数調整の実現可能性の検討するため、現実的にシカの獲れている場所を選定し、できる限りの高い捕獲圧で集中的に捕獲を行い、捕獲効率やシミュレーション結果等を検証しつつ、順応的に捕獲管理を行い、早急に成功事例を作ることが重要。

○関係行政機関は、効果的・効率的な捕獲方法の検討を進め、その検討結果については互いに情報の共有化に努めるなど、連携してヤクシカの個体数調整を推進。

4. 目標頭数の考え方の整理

○屋久島の暫定的な目標頭数は、実現可能性等を考慮して、20頭/km²。20頭/km²未満でも希少種への食圧が見られる地域では、10頭/km²。

○シカ被害対策は、生態系や農林業被害を軽減させることが目的で、遺産地域内では、特に生態系の維持・回復が重要になるので、目標頭数まで減少させればよいのではないことに留意。

5 ヤクシカ管理の地域区分

○生態系の被害状況は、インパクトが大きくなっている高密度地域と、現在は低密度だが、今後、増加が懸念され、絶滅危惧種の保全対策が急がれる地域など、地域によってヤクシカの生息密度と採食される植生による生態系への影響が異なることから、シカの移動が制限されるような河川を地区界とし検討。

○地区ごとに設定した指標となる植生等への影響の度合いやその復元状態などを評価して、シカ捕獲等を検討することが重要。

6 植生等の保護・保全について

○シカ被害対策は保護柵と捕獲とを組み合わせる実施することが重要。特に、南部～北東部の地域には、まだ希少種の残されているところがあるので、保護柵による保護・保全が重要。

○なお、植生保護柵については、その効果をモニタリングすること。

II 今後の検討課題

1. 捕獲が進んでいる地区での成果の分析

○他の地域での取組の参考とするために、小瀬田、宮之浦川周辺について、捕獲や生息密度、植生の状況等を分析し、捕獲の実現可能性を検証。

2. 順応的管理のためのモニタリング手法の検討

○シカ被害対策は、暫定目標頭数まで減少させればよいのではなく、生態系への影響を軽減することを目的とする生態系管理が基本となるため、関係各機関が連携して統一したモニタリング手法、生態系への影響把握や評価方法を定め、個体数調整等の効果の客観的評価を行うこと。

○シカの生息・植生モニタリングについては、継続して実施できる低コストな手法を検討することが重要。

3. 生態系管理の目標の検討

○シカの捕獲を検討する等の目標設定については、屋久島固有種の更新が滞っている箇所については、その固有種の更新、ツルランや希少なシダ類等への食害の状況や回復の状況、表土の流出が見られる所では一定量の落ち葉の堆積など地域に応じた指標を目標を検討。

4. 具体的なヤクシカ対策の方向性の検討

○屋久島全体の被害対策やその工程の検討については、捕獲が進んでいる地区の成果を基に、労力等を含め算出し、戦略的な検討が重要。